

## 地上を旅する神の民

へブライ人への手紙一章8〜16節

この人たちは皆、信仰を抱いて死にました。約束のものは手にしませんでしたが、……自分たちが地上ではよそ者であり、滞在者であることを告白したのです。(13)

信仰の偉人たちをこの章で紹介しながら、著者は彼らに共通して見られる一つの特徴をここに記します。それは、彼らがこの地上を旅するよそ者、寄留者として生き抜いたということです。彼らの故郷は天にあり、その天の故郷を目ざして旅を続けるのが信仰者だと自覚していたのです。信仰の父アブラハムがそうであるように、神を信じるとは神に呼び出されることです。それにより、生まれ故郷や自分の家が安住の地ではなくなりました。神のおられる所が私たちの新しい故郷になったのです。神を信じて生きる者たちは皆、地上を旅する民であり、天の都を目ざして生きる者たちです。私たちも、地上を旅する神の民の一員であることを今日も心に留めたいと思います。天の神がこの私を名指して呼び出してください。私たちは天の都を目指して人生の旅を続けていくのです。